

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

第6号

「ままごと」の新聞」は、
柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が
不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2013年4月10日
発行元：ままごと

「街と演劇」

まだ旅の途中

柴 幸男
Yukio Shiba

『朝がある弾き語りツアー』は順調に進んでいます。今回は、札幌と仙台の公演について報告しようと思います。札幌と仙台の『朝がある』は、それぞれとても印象深い景色になりました。同じ作品なのに思い出の匂いや色が違うから、不思議な感じです。

札幌は30人ほどで満席になる、雪の一室で公演しました。オノベカという素敵なギヤラリーです。ままごとの公演であんなに小さな空間は、初めて。雪の中、大石と二人で仕込みをしたのは、一つの部屋を劇場に仕立てていくようにとても面白いものでした。

本番では、僕も客席に紛れて、一つのストーリーを全員で囲んでの公演になりました。全員が、目の前の出来事を集中して観ている感じがありました。あんなにアットホームで、そして、笑いの多いままごとの公演は初めてだったと思います。ジンジャーエールやコーヒを片手にお客さんと談笑したのも楽しかった。この公演の感触を『弾き語りツアー』全体に引き継いでいきたい、そう思いました。

仙台の会場は、オノベカの数倍も広い、メディアアテーク1階のオープンスクエア。しかも、ここには壁がありません。隣のカフェも、正面玄関も、表の道路まで（全面ガラス張りなので）、どこまでも見渡せる開放的すぎる空間。この風景をどこまで劇に利用できるか、それがこの場所での実験であり、課題でもありました。



仙台メディアアテークの舞台はこんな感じ



舞台の向こうにロビーが、街がある



雪の中にあるのが札幌オノベカ



舞台になった一室、窓の外は雪

いろいろと迷いましたが、結局、正面玄関への壁を全解放して公演をしました。演じる大石、それを観る観客、そしてそれを眺める通りすがりの人たちという、3重の輪がそこに生まれました。この風景は、いつか僕がどこかのトークで話した「演劇を知らない人に、演劇を楽しんでいる人たちを、見せたい」という妄想が叶った瞬間でもありました。

仙台メディアアテークは図書館としても常時運営されていて、平日でもその利用者の多さに驚いたほどでした。オープンスクエアで準備や練習をしていると、ほとんどの人はこちらに興味を示してくれます。そして、立ち止まってしばらく眺めてくれる人もいました。特に本番中は、緊張や解放など作品の空気をロビーの人たちも

一緒にシェアしているようでもありました。それは僕らにとって、そしてお客さんにとってもきつと刺激的な空間であり時間でもあったでしょう。

図書館には本が好きなたちが集まります。図書館は、本を読まない人にも、本を大切に思っている人びとがいることの象徴になっていると思います。劇場もそうであらばいいと思うのです。すべての人に演劇が必要なのではありません。わたしは演劇は観ない、という人がいても構いません。だけど演劇を必要としている人がいることは想像してほしい。そして、その想像は、いつか自分が、何かを必要とする可能性も想像させるはず。それが美術なのか、音楽なのか、料理なのか、スポーツなのかは分かりませんが、でも、いつか自分が、家族が、友人が、何かを必要とするかもしれない。いや、今も、うしているかもしれない。そう想像できれば、そのすべてを尊重することができるはず。そう僕は思います。自分が、必要としないからといって、他人の現在を、自分の未来を、否定することはできないはず。

さて、『朝がある』の旅はまだ続いています。これを書いている今、ぼくらは小豆島の坂手港にいます。この港でも急遽公演することになりました。どんな弾き語りライブをするように公演ができるようになってきています。それは今回の目標の一つだったので、うれしいです。大阪では古本屋さんと公演をします。一見目で、ここでやりたいと思っただけで済んだ場所です。今回のゲストコラムはその本屋の店長である吉村さんに書いてもらいました。三重では元幼稚園だった劇場で公演します。数日間自分たちの劇場に作り変えたいと思っています。

最後に公演するのは湘野辺の桜美林大学です。湘野辺での公演は、この長い旅の報告になるでしょう。それが作品の中で語られるのかどうかわからないのですが、全国の朝はどんな蓄積されています。

Yukio Shiba
82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドトミ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞。同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

百年続く古本屋を 吉村祥 (FOLK old book store 店主) from 大阪



地下のイベントスペースでは、食・音楽・演劇・トーク・展示など多種多様なイベントを開催中。
(<http://booklife.old-folk.shop-pro.jp>)

大阪でFOLKという名前の古本屋をやっています。始めてまだ2年と少し。始める前、FOLKという名前もまだないころに友達とケンタッキーフライドチキンでどういうお店にしたいか、あまだこうだと話していました。「せつかく始めるなら百年はやりたいね」と話したのを覚えています。ほとんど子どもが瞬発力で言っちゃうみたいに（一万年って言うのと変わらないノリで）言ったけど、ずっと胸に残っている。いま、実際に百年やりたいと思っています。子どもっぽいかもしれませんが、百年という数字にあこがれと恐れとロマンを感じます。ほとんどの人が百年生きられないじゃないですか。物に閉じては今ここにあるすべてが一新されてるような気もするし、ほとんどが残っているような気もする。FOLKはライブをしたり展示があったりカレーを食べるイベントがあったり、今回みたいにお芝居をしたりとろんなイベントをやっています。イベントによってさまざまな人が来られるし、本の品ぞろえも内装もどんどん変わっていく。生き物と物の両方みたいやなと思います。百年生かしたい。

26歳でお店を始めたので実際126歳まで生きないと百周年を見られないわけです。それでもその瞬間を見たい。医学がすごい進んだとしても126歳のぼくはきつと相当よばよばで、孫かひ孫に抱えられながら「いろいろあったなあ」って思いながらビールを飲んでその光景を見渡したいです。子どもみたいにニヤニヤしながら。

吉村祥 (Sho Yoshimura)
古本と喫茶の店FOLK old book store 店主。最近の口癖は「もうなに屋か分からなくなってきました」

「ハートのコート。」 vol.05

宮永琢生 〔制作〕

みなさん、ごぶさたしております。TwitterにもFacebookにも飽きまちゃって、みなさんに近況をお知らせできておりませんが、大丈夫。ほくはげんきです。さて、んなわけで、「ままごと」は、いわきに行かせていただいたり、名古屋に行かせていただいたり、札幌に行かせていただいたり、仙台に行かせていただいたり、と、全国各地を飛び回っております。いわきでは1日4ステ（スタッフが）とゆーハードなスケジュールを各セクションの天才的なスタッフワークによりなんとかが切り抜け、名古屋では「劇天」とゆー新たな称号を得て、札幌では豪雪の中で柴が我々に雪を投げつけて「ヒャド！」（ドラ○ンクエスト参照）と言っていて、仙台では毎日牛タン食べてました。あーちょーたのしかつた！



長谷川健一「423」

京都が生んだ日本最後の歌うたい長谷川健一氏による最新音源。プロデュースは木下ジム・オルーク氏。ゲストミュージシャンも、石橋英子氏、山本達久氏、波多野敬子氏と、最強。

いま小豆島へ向かうフェリーから海を眺めながらこのアルバムを聴いています。1曲目の「あなたの街」が流れた瞬間から、音楽が世界を七色に変えて、目の前に広がる大海原と溶け合っています。あまりにも世界は美しく、なんだかいるる街で出逢った人たちの顔が浮かんで、いつの間にか涙があふれ出していました。

世界はまだ自分の知らないことばかりだな。小豆島ではどんな人と出逢えるかな。たのしみだな。いつか全国のみなさんと出逢えることを願いながら、今日はこの島で遊んでこようと思います。ではわ。いつてきまーす。

「いわきのこと」第5回

端田新菜 〔俳優〕

これを書いている今日は2013年3月11日。午後2時すぎです。正直なところ、2年前のあの日ですぐぐ遠く感じます。その一方で、3年前や7年前くらいのことをとても最近のことのように感じることもあります。でもそれはきっと、歳のせい。震災からの日々が淡いピンク色のレイヤーがかかっているみたいに、わたしの記憶を以前と以後に分けてくれるけれど、そんな記憶の中の自分は、なんとも所感を感じがします。レイヤーの淡いピンクはたぶん、一昨年の4月にいし いみちさんが「桜の花がティッシュペーパーみたいに見える」と言ったからついた色だと思います。

2011年の6月にままごとの『わが星』でいわきに行き、そこで80人もいわきの高校生と一緒に演劇で遊びました。そのうちの30人くらいとは今でも交流があり、彼らの日々のつぶやきをツイッターで眺めたり、もらった手紙を読み返したりしています。

たまに会いに行ったりもします。会いに行けるのも、でも彼らが演劇を続けてくれているからだなあ。卒業式や公開研究会も、行こうと思えば行けたけれど、行こうとしなかった。わたしと彼らは演劇でつながっています。演劇ってなんだろう。

震災で被災した地域は広くありますが、わたしはまだ、そのほとんどを何も知らないままです。漠然といわきのことだけを思いながら2年を過ごしました。福島県のことほとんど知りません。

今、午後2時44分。NHKでの追悼式の中継を眺めながら、そして、彼らがぼつりぼつりつぶやいたりしゃべりたり想いをあふれさせていたりいる言葉たちが混じるツイッターの画面を眺めながら、これを書いていきます。午後2時48分。黙祷が終わりました。生まれてきてくれてありがとう。うちにきてくれてありがとう、と息子に言っていて、それからまた、みんなの顔を思い浮かべました。

あれ？ 思い浮かべた彼らの顔には、淡いピンクのレイヤーはかかってない。なんだかもつと、むしろ黄緑。あはは、なんだ。たぶん続く。

「縁談のテーブル」第1回

大石将弘 〔俳優〕

大石が人生の指針を得るために、いま話を聞きたい人に会いに行く企画。第1回は、劇団に所属している同世代の役者さん二人と、僕たちが抱える二つの問題について話してきました。

〔前編〕 「主宰に乗っかってるだけ問題」

坂口 前に「主宰がすごいだけだ」みたいな話をしたけど。

大石 「乗っかってるだけ」問題。

坂口 それはすごいありますよ。「岩井（秀人）さんすごい」と思ってハイバイ入ったけど、岩井さん岩井さんばかりで悔しいって思うようになって。でも最近、岩井さんはやっぱすごいよって思うようになって。楽になってきましたね、劇団にいる時。

菊池 いい話だね。

大石 ハイバイも、あまり劇団員公演がないですよ。

坂口 あっても呼ばれたり呼ばれなかったり。だから個で頑張る。劇団にいてもいなくても個で頑張れば一緒だと思っただ。

大石 劇団員を毎回全員出すみたいな劇団もあるじゃないですか。でもままごともそうじゃない。劇団員だから出られるわけじゃない。僕はそれいいなと思って。

坂口 僕も縛られてないっていうか案ですけどね。

大石 ナイロンの舞台はオーディションがあるの？

菊池 KERA（分ラリーノ・サンドロヴィッチ）さんが決めるよ。でも稽古で2、3回やってダメだったらもうほかの人になっちゃうことも。その一瞬のチャンスをかかせる力がまたまた自分には足りなくて。最近、劇団外の現場に出て、外からKERAさんに「面白いいですよ

<お相手> 菊池明明（ナイロン100℃）と坂口辰平（ハイバイ）



ね」って言ってもらえるように、そういうアピールの仕方もあるなって、それは意識してる。

大石 ああ、なるほど。

坂口 いっしょ（大石）さんは、（世間的に）柴さんの名前ばかり出て、苦しいみたいなのはあったりするの。

大石 苦しいっていうのは別になくて。柴さんは、今東京でやることよりも、どこかに拠点を構えてやりたいみたいで。坂口 いっしょさん自身はそれでいいんですか。

大石 それは興味の方向は合ってると思うか。一方で劇団の外で俳優の仕事もしたく。来年は逆に劇団に出る予定がないから、うまくバランスとってやりたい。個人として自立していかないと楽しい未来が描けないというか。楽しい未来を生かすために、やりたいことを選んでいかないと。

坂口 それはほんと必要ですよ。個で頑張るっていう。

（続く）

ままごと News ここでは、最近起こったままごとに関するさまざまなニュースをご紹介します。

期間限定ブログスタート

瀬戸内国際芸術祭に参加するため、小豆島にたびたび滞在する予定のままごと。その生活や創作の様子をお伝えするべく、柴が4月21日までの期間限定ブログ「港の記憶」をスタートさせました。(http://mama-goto.tumblr.com) 美しい海や島で出逢った人たちの写真もたっぷり。ぜひご覧ください。



『あゆみ』が渡辺源四郎商店に登場

オトナの劇団の立場から高校演劇にアプローチする試みとして、畑澤聖悟率いる渡辺源四郎商店が『オトナの高校演劇祭』を開催。同企画の中の一つとして、柴作品『あゆみ』が畑澤の潤色、うさぎ庵の工藤千夏による上演台本・演出により上演されます。4月20日から28日まで青森のアトリエ・グリーンパークにて、5月3日から6日までザ・スズナリにて。



『わが星』を天野天街が演出

熊本に拠点を置く、夕辺東亜主宰の演劇ユニット「雨傘屋」。その第4回公演として『わが星』が上演されます。演出を手掛けるのは、名古屋を拠点に活動する少年王者館の天野天街。公演に向けて、柴は「僕の夢のひとつに、自分の戯曲を天野さんに演出してもらおうことがありました」と喜びのコメントを寄せています。5月31日（金）から6月4日（火）まで、熊本市のギャラリーADOにて。

柴が「はえぎわ」に出演！

昨年、『○○トアル風景』で岸田國士戯曲賞を受賞し、近年ますます活躍に注目が集まる劇作・演出家、俳優のノゾ工征爾。彼が主宰する劇団「はえぎわ」の人気作『ガラパゴスパコス』再演に、柴が俳優として出演することが決まりました。上演は6月7日（金）から16日（日）まで、三鷹市芸術文化センター 星のホールにて。



『ガラパゴスパコス』初演より 撮影=梅澤美幸

NEXT

■柴幸男【演出】・大石将弘【出演】・宮永琢生【製作統括】

「朝がある一弾き語りTOUR—」
4月23日【火】—25日【木】
@大阪・FOLK old book store
4月28日【日】・29日【月・祝】
@三重・津あけぼの座スクエア
5月10日【金】—12日【日】
@神奈川・桜美林プルヌスホール

■柴幸男・大石将弘
【作・演出・出演】

瀬戸内国際芸術祭2013【春期】
小豆島 響の郷+坂手港プロジェクト
ままごと—港の劇場—(おさんぼ演劇)
「赤い灯台、赤い初恋」(案内人|柴幸男)
「さかのぼり、まだ見ぬ家へ」
(案内人|大石将弘)
2013年4月5日【金】—21日【日】
@香川・小豆島 坂手港

編集後記

端田さん以外の3名は、第6号の原稿を小豆島から送ってくれました。また大石さんの新連載が始まりました。インタビューのセッティングから原稿執筆までライターさながら奮闘ぶりです。次号、第7号もお楽しみに。(熊井)

企画・編集=ままごと
構成=熊井玲
デザイン=西山昭彦